

# 粃米サイレージによる和牛繁殖農家の飼料費削減

—JA真室川町の取組み—

主事研究員 小田志保

近年、和牛繁殖農家では飼料価格高騰や高齢化で離農が増加し、子牛の頭数減少と価格高騰により、購入側の肥育農家の経営悪化が深刻化するなど、和牛生産そのものの衰退が懸念される事態に至っている。

そのため、和牛繁殖農家への経営支援がJAグループでも大きな課題となっているが、本稿では和牛繁殖農家の経営支援の一環としての飼料費削減のために、<sup>もみまし</sup>粃米サイレージ(粃米を発酵させた濃厚飼料)に2000年代後半から取り組んでいるJA真室川町(以下「JA」)の事例を紹介する。

## 1 飼料費高騰と米価下落が和牛繁殖農家の経営を圧迫

JAの管内である山形県真室川町(以下「同町」)では、14年1月時点で、畜産農家47戸のうち40戸が和牛繁殖農家で、また稲作との複合経営が多いのも特徴である。

稲作と和牛繁殖の複合経営においては、2000年代後半からの配合飼料価格の高騰に米価下落が加わり経営が急速に悪化した。このため、和牛繁殖農家の離農多発が懸念される事態となり、経営を維持するための新たな取組みが課題となっていた。

## 2 政策支援等で飼料用米生産が拡大

こうした事態のなかでJAが取り組んだのは、飼料費削減のための管内における飼料用米の作付推進である。JAでは、水田転作面積

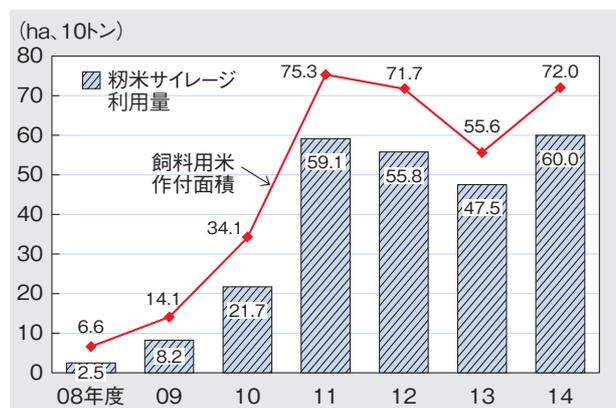
の緊急拡大配分(同町で60ha)があった08年度より、飼料用米の作付推進を開始した。取組初期の2年間は、町とJAの担当者が連携して作付けを推進した。しかし、取組みが定着した10年度以降は、JAが生産者と作付けや収穫の調整を行っている。

初年度の08年度における飼料用米の作付面積は6.6haだったが、産地づくり交付金の交付単価が倍増した10年度に前年度比20ha増の34.1haとなった。さらに前年産の米価下落を受けて、11年度には同41.2ha増の75.3haへ拡大した。12年度、13年度は震災の影響で米価が押し上げられ、13年度の作付面積は55.6haに減少したが、新たな米政策による水田活用の直接支払交付金が始まった14年度は再び70ha台となっている(第1図)。

## 3 粃米サイレージによる飼料費削減効果

こうして飼料用米の作付が拡大する一方で、

第1図 JA真室川町管内の飼料用米作付面積と粃米サイレージ利用量



資料 JA真室川町内部資料  
(注) 14年度は概算。

畜産農家が利用しやすいようにJAは飼料用米を加工した粳米サイレージの生産に08年度より取り組み、町内の畜産農家による利用も急速に拡大した(第1図)。例えば08年度から13年度までに、利用量は24.9トンから475.2トン、利用農家数は5戸から17戸(うち14戸が繁殖経営)へ増えた。

利用拡大の第1の理由はそのコストの安さである。JAは、耕種農家から生粳を8円/kgで買い取り、加工実費15円/kgを上乗せした23円/kgで粳米サイレージを畜産農家へ販売するが、08~13年の配合飼料価格(肉牛肥育用)の単純平均は63.1円/kgで、その2.7倍である(農林水産省「農業物価統計」)。また農林水産省「平成25年度農業経営統計」によると、13年度の子牛1頭当たり配合飼料購入費は93,114円であり、これを粳米サイレージに単純に置き換えると59,174円削減できる。これは子牛1頭当たり生産費の15.7%にも相当する。

第2の理由は品質である。JAでは粳米サイレージ生産に際して、カントリーエレベーター付属のプレスパンダーで加工するという工夫をした。粳米を破碎する際に熱が加わり玄米がアルファ化するため、通常の加工方法に比べて消化性が高くなるのである。

このようにJAの粳米サイレージは価格が安く、かつ品質が高いため、管内の畜産農家において利用が広まった。なおJAによれば、一般に配合飼料を粳米サイレージに代替する場合、コストだけでなく分娩間隔の長期化にも配慮する必要があるが、14年度の管内平均の分娩間隔は県平均より30日程短い389日であり、影響は特段みられなかったとのことである。

#### 4 利用拡大に果たしたJAの役割

粳米サイレージ利用の拡大にあたっては、以下にあげるJAによる様々な取組みの効果が大きかった。

1つは品質向上のための取組みである。粳米サイレージは、粳米の破碎後に1~2か月の乳酸発酵を経て完成する。JAは、畜産試験場と連携し、乳酸発酵のための適正水分量等について検討を重ね、品質管理のノウハウを高めてきた。次に牛の嗜好性に問題がないことの確認である。JAは地域の一部の繁殖農家に協力を仰ぎ、試作品を実際に給与してもらい、牛の嗜好性に問題がないことを確認した。最後に普及についての研修活動である。JAは粳米サイレージの給与マニュアルを作成し、給与方法について現地研修会や巡回指導を重ねた。

繁殖農家にとって飼料の変更にはリスクが伴うが、このようにJAが畜産試験場や地域農家と連携し給与試験を行ってその実効性を検証したうえで利用を推進したことで、地域の畜産農家からの理解や信頼が高まり、利用が拡大したのである。

今回は粳米サイレージの事例を紹介したが、一般に農家が新規技術を導入する際には、導入効果の検証が不可欠である。しかし、個々の農家はそのための十分な費用や時間をかけられない。地域農業振興に不可欠な新規技術の導入・普及のためには、JAの役割が極めて重要であることを改めて指摘したい。

#### <参考文献>

・丹康之(2011)「酪農家や繁殖牛農家が絶賛、飼料米ソフトグレインサイレージ」『現代農業』4月号、P268~275

(おだ しほ)